『南山神学』43 号（2020 年 3 月）pp. 69-98.

「天使と魂は種において異なるのであるか」

―トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』第 7 問題について―

井上　淳

トマス・アクィナスは『定期討論集 魂について』（*Quaestiones disputatae de anima*）の第 7 問題において[1]，「天使と人間の魂は種において異なっているか否か」（Utrum angelus et anima differant specie.）について論じている[2]。この定

[1] トマス・アクィナスの著作の執筆年代については J. P. トレルの次の研究書に示されている研究者の一般的な見解に従う。Jean-Pierre Torrell, *Initiation à Saint Thomas d'Aquin: Sa personne et son oeuvre* (Paris: Les Éditions du Cerf, 2015). 邦訳は『トマス・アクィナス 人と著作』保井亮人訳（知泉学術叢書 4，2018 年）。それによると，トマスの主著とされる『神学大全』の中で人間本性について論じられている *ST* I, qq. 75-119 の執筆は 1267-68 年，『定期討論集 魂について』*QDA* はそれに少し先立つ 1265-66 年である（保井亮人訳，567 頁参照）。

[2] 本稿執筆にあたっては，主に次の文献を参照した。

Bazan, Bernardo C. "The Human Soul: Form *and* Substance? Thomas Aquinas's Critique of Eclectic Arstotelianism." *Archives d'Histoire Doctrinale et Littéraire du Moyen Age*, 72 (1997), pp. 95-126.

Blanchette, Oliva. *The Perfection of the Universe according to Aquinas: A Teleological Cosmology*. University Park, Pennsylvania: Pennsylvania State University Press, 1992.

Brower, Jeffrey E. "Aquinas on the Individuation of Substances," in *Oxford Studies in Medieval Philosophy*. Edited by Robert Pasnau. Oxford: Oxford University Press, 2017, pp. 122-150.

Collins, James M.A. *The Thomistic Philiosophy of the Angels*. Washington, DC: The Catholic University Press, 1947.

Pasnau, Robert. *Thomas Aquinas on Human Nature*. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.

________. *Thomas Aquinas: The Treatise on Human Nature, Summa Theologiae 1a 75-89*. Indianapolis: Hackett Publishing Company, 2002.

期討論集では魂の本質とその固有のはたらきを中心に人間の本性について探究されている。この第7問題に先立つ第6問題においては，人間の魂が質料と形相の複合体であるか否かが論じられ，結論として，魂は質料と形相の複合体ではなく，自存する形相のみの存在者であるということが明らかにされた。ただし魂は自らの存在と同一なのではない。自らの存在と同一であるのは神のみである。魂は神から存在を受けとることによって自存する形相なのである。その意味で魂の内には可能態と現実態の複合が見られるのである[3]。

さてしかし，以上のことは被造物である知性的実体の本性に共通する事柄である。すなわち，自存する形相のみの存在であり，神から存在を受けとることによって存在するものであるということに関する限りは，魂と天使たちは同じなのである。つまり，魂と天使は知性的実体という類においては一致する。では魂と天使の違いはどこにあるのであろうか。第7問題で論じられるのは，この点に関してである。類において同じであるとしても，天使と魂には区別がある。その区別は何に基づいた区別なのであるか。そしてそれは種としての区別であるのか否か。論点はここに置かれている。そしてこの問いは天使たち相互の区別にも関わって来るのである。天使たちも非質料的実体なのであり，質料を持たない形相のみの存在である。それゆえ，天使相互の区別は，質料ではなく，形相による区別である他はないのである[4]。もし天使と魂の区別が形相によ

Wippel, John F. “Metaphysical composition of Angels in Bonaventure, Aquinas, and Godfrey of Fontaines,“ in *A Companion to Angels in Medieval Philosophy*. Edited by Tobias Hoffmann. Boston: Brill, 2012, pp. 45-78.

石田隆太「トマス・アクィナスにおける人間の魂の個体化——魂と身体の関係をめぐって——」『中世思想研究』第57号（2015年）55-68頁.

________.「質料概念と天使の非質料性——トマス・アクィナスによる天使論の一側面——」『中世哲学研究』第35号（2016年）22-40頁.

________.「トマス・アクィナスと天使の個体化——個体化の原理の射程をめぐって——」『中世思想研究』第59号（2017年）31-45頁.

稲垣良典『在るものと本質について』（知泉書館，2012年）

坂口ふみ『天使とボナヴェントゥラ——ヨーロッパ13世紀の思想劇』（岩波書店，2009年）

[3] Cf. *QDA*, q. 6, cor.

[4] Cf. *QDA*, q. 7, s. c.

る区別であるとすれば，天使たち相互の区別と天使と魂の区別は同じ原理に基づくものと考えられるのである。

トマスは，人間の魂と天使たちが同じ種に属するという考えについて，その見解を最初に唱えたのはオリゲネスであろうと述べている[5]。オリゲネスによれば，最初に神は理性的な被造物を創造し，それらを等しいものとして創造された。そして理性的被造物は，それぞれが持つ自由意思によって，神にしたがう者と神に背く者に分かれ，その侍従と離反の度合いに即して事物の間に相違が生じたとされるのである。トマスはこの考えの不備を指摘する。オリゲネスは個々の事物の善悪にばかり目を向けていて，この被造界全体についての考察を見落としているのである。トマスによれば，重要なのは全体としての善であり完全性である。この世界の被造物はすべてが均等に良いものなのではない。そこには明らかに優劣が見いだされる。完全性においても善性においても様々な差異がこの被造界には存在する。神は一体なぜこのように優劣をつけて被造物をお創りになったのだろうか。

それは，この世界が全体として完全なものとなるためであるとトマスは主張する。ちょうど賢明な建築家が家を作る際に，あらゆる部分を均等に美しいものにするのではなく，優劣の差を持った各部分によって全体を形作り，家全体の構成が完全なものとなるように設計するのと同様である。もしすべての部分が均等に美しいのであれば，その家は不完全なものでしかないのである。この被造界も同様であるとトマスは言う。それぞれの被造物が優劣の差を持って存在を受けとり，この世界全体を構成しているのである[6]。もしすべてが均等なのであれば，この世界は不完全なものでしかない。不均等であるからこそ完全な世界が成立するのである。トマスのこの考えは，決して否定的な観点からのものではなく，むしろ逆に，神によって創られたすべてのものの存在意義を肯定

---

[5] Cf. *QDA*, q. 7, cor.

[6] トマスにおける世界の完全性についての研究には次のものがある。Oliva Blanchette, *The Perfection of the Universe according to Aquinas: A Teleological Cosmology* (University Park, Pennsylvania: Pennsylvania State University Press, 1992)

的に捉えようとするものである。神は良いものだけでこの世界をお創りになっているのではない。優劣の差をつけてお創りになった。それは神の英知によるものであり，どんなに取るに足らず劣悪に見えるものであっても，それは世界全体の完全性を支えているのであり，大きな存在意義をもってこの世界に存在しているのである。

このような優劣の差は知性的諸実体の中にも見られる。それが天使たちの間の差異であり階級であり，また天使たちと人間の魂の差異なのである。そしてここにもまた, 全体の善のための諸部分の優劣の差異という考えが基盤にある。人間の魂は知性的諸実体の中で最下位に置かれる。魂は知性的実体の類においては最も不完全である。しかしこれは人間の魂に対する単なる否定的な見方なのではない。人間の魂は知性的実体の序列の最下位あるけれども，この被造界全体が完全であるために欠かすことのできない存在であるとトマスは考えているのではないだろうか。また，トマスは魂と神との直接的な結びつきについても肯定的である。トマスによれば，人間の魂は，自然本性的に上位にある天使の媒介によることなく，神によって直接的に義とされたり至福たらしめられたりするのである[7]。

天使と人間の魂の相違点として第一に挙げられるのは，天使と違って人間の魂は本性的に身体と合一されるということである。しかし，天使たちも人間の魂と同じように身体を持っていると主張する人々もいる[8]。そこでトマスはその考えに対して反論し，たとえもし天使が身体を持つとしても，それは天使と魂が同じ種に属することの理由にはなりえないと述べている。なぜなら，たとえ天使たちが何らかの身体と合一されているとしても，その身体は我々人間が合一されているような物体的な身体とは全く別の種類の身体であるはずだからである。

---

7 Cf. *QDA*, q. 7, ad 11; *ST* I-II, q. 5, a. 6.

8 坂口ふみによれば，純粋な形相のみの存在は神だけであり，あらゆる被造物は形相と質料から成るという考えを持っていたのは，ボナヴェントゥラをはじめとするフランシスコ会系の思想家であった。坂口ふみ『天使とボナヴェントゥラ』（岩波書店，2009 年）136 頁を参照。

更には，天使たちと人間の魂それ自体が質料と形相から成っているという主張にも触れて，そのこともまた天使と魂が同じ種に属することの理由にはなりえないとトマスは言っている。なぜなら，もしその質料が天使と魂に同一で共通的なものであり，空間的拡がりを持つ質料であるならば，天使も魂も物体に他ならないことになってしまうが，知性認識のはたらきが身体のはたらきではありえないことがすでに証明されている以上，それはありえないことである。また，もし天使たちの質料が魂の質料と同一で共通的なものではなく別の特質を持つものであるとすれば，それは種的に異なる質料なのであるから，いずれにしても天使と魂が同じ種に属することは不可能なのである。

以上のことから，天使と魂が質料に基づいて種的に同じものであるとする説はすべて斥けられる。天使と魂は形相のみの存在である限り，その区別は形相的区別である他はないのである。それでは，天使と魂は何に基づいて異なるのか。すでに見たように，トマスはそれは完全性の段階の相違に基づく違いであるとしている。質料的実体においても本性の完全性の異なる段階がそれぞれの実体の種の違いと序列を生み出している。たとえば数の 1，2，3 が，たった 1 つが加わったり減じたりすることで種が変わるように，非質料的諸実体すなわち知性的諸実体においても，本性の完全性の違いが種の相違を生じさせるのである。

トマスによれば，知性的諸実体において存在する諸々の種の段階の序列は，最も完全である第一能動者，すなわち神との関係に即して捉えられうる。神に近いものほど，より完全なのである。そして，神が自らの本質という一つのものによって全てのものを知ることができるのに対し，天使たちは，神に近い天使ほど必要とする可知的形相の数が少なく，遠のくほど段々と必要とする形相の数が増してゆく。この序列において最も低い段階に位置するのが人間の魂である。人間の魂は，天使たちと異なり，可知的諸形相を生まれつき持っていない。魂は知性認識のはたらきを行うために必要な可知的形象を外部から獲得しなければならないのである。そしてそのために必要なのが，身体器官によって

なされる感覚のはたらきなのである。身体と合一されるということが魂に本性的に適合するのはそのためである。

天使も魂も知性的な実体であるということにおいて一致している。知性的なものであるということは最も高貴なことであるから，それが天使においても魂においても最終的種差であるようにも思われる。実際，天使と魂が同じ種に属すると主張している人々はこのことを最も強固な根拠だと考えているとトマスは言っている[9]。しかしトマスはこれに対して次のように答えている。単に「知性的である」ということが最終的種差なのではない。天使も魂も知性的実体であることにおいて共通するのであって, それは類として同じということである。知性的なものであるというだけでなく，どのような仕方で知性的なものであるのかということが最終的種差となり, 種の区別を生じさせるのである。つまり，知性的能力の完全性の段階にしたがって，知性的実体はそれぞれ種を異にするのである。天使たち相互はこの仕方において種的に異なるのであり，そして天使たちと魂もまた，同じ仕方において種的に異なるのである。

トマスは，人間の魂は，非質料的な実体であると同時に，身体の形相として身体に合一されるものでもあると考えている。すなわち魂は自存者でありかつ身体の形相なのである。このことはすでに第 1 問題において示されたことであるが，トマスはこの第 7 問題において，人間の魂のこの特殊な本性の根拠をより明らかにしているのである。

翻訳と註

トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』第 7 問題

「天使と魂は種において異なるのであるか」[10]

---

[9] Cf. *QDA*, q. 7, ad 14.

[10] 本訳は Leonina 版，すなわち，B. C. Bazán ed., *Sancti Thomae de Aquino Opera Omnia iussu Leonis XIII P.M. edita,* Tomus XXIV-1, *Quaestiones Disputatae de anima* (Roma: Commissio Leonina, 1996) を底本とし，註の多くもこの版に依拠した。しかし次の二つの版も常に参照し，Leonina 版と異なる場合にはそれを註記した。ただし綴りの違いなどの，さほど重

第７問題では，天使と魂が種において異なるのであるか否かが問われる[11]。そして〔その答は〕否であるようにも思われる。なぜなら，

【異論】

(1) 固有でかつ本性的なはたらきが同一であるものは種において同一である。なぜなら，事物の本性はそのはたらきによって判別されるからである。しかるに魂と天使は，同一の固有でかつ本性的なはたらき，すなわち知性認識のはたらきを有している。それゆえ，魂と天使は同一の種に属するのである。

要ではないと思われる異同については一々註記しなかった：James H. Robb, ed., *St. Thomas Aquinas Quaestiones De Anima* (Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1968); M. Calcaterra and T.S. Centi ed., *Quaestiones Disputatae De Anima* in *Quaestiones Disputatae*, vol. 2, 10th edition (Turin: Marietti, 1965).　以降 Robb 版および Marietti 版と略記する。また，翻訳にあたっては，以下の現代語訳を参照した。John P. Rowan, *The Soul: A Translation of St. Thomas Aquinas' De Anima* (St. Louis: Herder Book Co., 1951); St. Thomas Aquinas, *Questions on the Soul*, trans. James H. Robb (Milwaukee: Marquette University Press, 1984); Saint Thomas d'Aquin, *Questions disputées de l'âme*, introduction, traduction et notes par Jean-Marie Vernier (Paris: L'Harmattan, 2001). 以降 Rowan 訳，Robb 訳，および Vernier 訳と略記する。Rowan 訳は Marietti 版を用いた翻訳，Robb 訳は本人の校訂版を用いた翻訳，Vernier 訳は Leonina 版を用いた翻訳である。

なお，本稿で用いるトマス・アクィナスの著作とその略号は次の通りである。*Quaestiones disputatae de anima* (*QDA*), *Quaestiones disputatae de veritate* (*QDV*), *Quaestiones disputatae de potentia* (*QDP*), *Quaestio disputata De spiritualibus creaturis* (*De spir. creat.*), *Super Librum De causis* (*In De causis*), *Sententia Libri De anima* (*In De anima*), *Sententia super Meteora* (*In Meteor.*), *Sententia super Metaphysicam* (*In Metaph.*), *Expositio Libri Posteriorum* (*In Anal. Post.*), *Scriptum super libros Sententiarum* (*SSS*), *Summa theologiae* (*ST*), *Summa contra gentiles* (*SCG*), *Quaestiones de quolibet* (*Quodl.*), *Compendium theologiae* (*CT*), *De unitate intellectus contra Averroistas* (*De unitate intellectus*), *De ente et essentia* (*De ente*), *De substantiis separatis* (*De subst. Separ.*), *Super Boethium De Trinitate* (*In De Trinitate*). テキストは *SSS* に Mandonnet et Moos 版を，*QDP*, *SCG*, *In Metaph.* に Marietti 版を，*In De causis* に Saffrey 版を用いた他は，すべて Leonina 版を用いた。

[11] *QDA*, q. 7 の平行箇所として Leonina 版は次の箇所を挙げている。*SSS* II, d. 3, q. 1, a. 6; II, d. 17, q. 2, a. 2, ad 5; *SCG* II, c. 94-95; *QDP*, q. 3, a. 10, ad 10; *ST* I, q. 75, a. 7.　Marietti 版と Robb 版は *SSS* II, d. 3, q. 1, a. 6; *SCG* II, c. 94; *ST* I, q. 75, a. 7 だけを挙げている。

(2) ところが〔この論に対して〕，魂の知性認識は推論を伴うが，しかし天使の知性認識は推論を伴わない，したがって，魂と天使のはたらきは種において同じものではない[12]，という意見があった。―― それに対する反論。同じ一つの能力が，種において異なる別々のはたらきの根源であることはない[13]。しかるに，我々は同じ一つの能力によって，すなわち可能知性によって，推論を伴わずに或るものを，すなわち第一の諸原理（prima principia）を知性認識するのであるし，推論を伴って或るものを，すなわち結論を知性認識するのである。それゆえ，推論を伴うか伴わないかで知性認識のはたらきが種を異にするわけではない。

(3) 更に。推論を伴って知性認識することと推論を伴わずに知性認識することが異なるのは，ちょうど「運動において在ること」と「静止において在ること」が異なるのと同様であるように思われる。推論とは一つの事柄から他の事柄への知性の運動なのだからである。しかしながら，運動において在ることと静止において在ることは種を異ならせるわけではない[14]。なぜ

---

[12] Cf. *ST* I, q. 58, a. 3, cor.:「だから，下位の知性（つまり人間知性）の場合にあっても，それが真理認識における完成に到達するのに，やはり知性的なはたらきの一種の運動たる推論 discursus というもの――すなわちそれは一つのことがらの認識から他のころがらへの認識へと進むものゆえ――によるのである。それがもしかりに,既知の基本命題 principium の認識それ自身において，そこから帰結するあらゆる結論 conclusiones を，それがあたかも既知のものなるかのごとくに看取するとしたならば，そうした知性にあっては推論の必要は毫も存しないであろう。いま，まさしくこれが，天使たちの場合なのである。」日下昭夫訳『神学大全』4（創文社，1973 年）

[13] Leonina 版は non est eadem potentia principium，Robb 版と Marietti 版は principium を欠く。

[14] 運動は始めと終わり（終局）を持つ。推論という運動の終局は何らかの結論の知性認識に到ることであり，そこにおいて運動は静止する。しかし運動と静止は同じ知性のはたらきに属することである。次の箇所を参照。*ST* I, q. 79, a. 8, cor.:「明らかに，然し,静止ということと運動ということとは，自然的事物においてもやはり，それぞれ別な能力に還元されるのではなく，却って同じ一つの能力に還元されるのであって，すなわち，ものは同一の本性によって或る場所へ動かされもするし或る場所に静止もする。いわんや，だから，我々は同一の能力でもって，知性認識もするし推理もするのである。このようにして人間においては，理性といい知性といっても，ともに同一の能力であることが判明する。」（大鹿訳）

なら，註解者（アヴェロエス）が言っているように[15]，運動はその運動の終局がそこに在るところの類に還元される（reducitur）からである。それゆえにアリストテレスは同じ箇所に[16]，存在するものの種の数だけ運動の種もあると言っているのである。「存在するもの」は「運動を終局するもの」だからである。それゆえ，推論を伴う知性認識と推論を伴わない知性認識もまた種において異なっているわけではないのである。

(4) 更に。天使たちと同じように至福者たちの魂も〔神の〕御言（Verbum）において物事を知性認識する。しかるに，御言における認識は推論を伴わない認識である。それゆえにアウグスティヌスは『三位一体論』第 14 巻において，天国では認識は変転的（uolubilis）ではないであろうと言っているのである[17]。したがって，知性認識が推論を伴うか伴わないかによって魂が天使と異なるわけではない。

(5) 更に。多くの人によって主張されているように，すべての天使が種において一致しているわけではない[18]。しかしすべての天使は推論を伴わずに知性認識するのである。それゆえ，推論を伴って知性認識するか推論を伴わずに知性認識するかが，知性的諸実体における種の違いを生じさせるのではない。

(6) ところが〔この論に対して〕，天使たちの間でも，或る天使たちは他の天使たちよりもより完全な仕方で知性認識するのだという意見があった。――

15 Averroes, *In Phys.* III, 4.

16 Cf. Aristoteles, *Phys.* III, 200b32-33, 201a8-9:「そして，運動変化は実際の事物を離れてはありえない。〔中略〕以上のようにして，運動変化および変化一般の種類は，存在するもののあり方と同じ数だけあることになる。」内山勝利訳「自然学」『アリストテレス全集』4（岩波書店，2017 年）

17 Augustinus, *De Trin.* XV, 16:「神の言と言われても神の思考とは言われないのであるが，これは神において，言となるべくあるとき形相を受け取り，あるときそれを失い，その結果，形相を失ったままで旋回が生じるというように，神の中に一種の旋回があるといったことが信じられないためである。」泉治典訳「三位一体」『アウグスティヌス著作集』28（教文館，2004 年）

18 Lenonina 版と Robb 版は non omnes angeli，Marietti 版は omnes angeli non. トマス・アクィナス自身は，天使はそれぞれが種を異にすると考えていた。*ST* I, q. 50, a. 4 を参照。

それに対する反論。優劣（magis et minus）〔による違い〕は種の違いなのではない。しかるに，より完全に知性認識することと不完全に知性認識することとは優劣による違いに他ならない。それゆえ，完全な仕方で知性認識するか不完全な仕方で知性認識するかによって天使たちが種的に異なるわけではないのである[19]。

(7) 更に。人間の魂はすべて同一の種に属している。しかし，すべての魂が均等な水準で知性認識するわけではない。それゆえ，知性的諸実体における種の違いは，より完全に知性認識するか不完全に知性認識するかということによるものではないのである。

(8) 更に。人間の魂は，結果によって原因を知る推論によって，あるいは逆に原因によって結果を知る推論によって，知性認識すると言われる。だがこのことは天使たちにも適合するのである。なぜなら『原因論』に述べられているように[20]，知性実体は自分より上位の実体のことを，自分がそれによって原因されたがゆえに知るのであり，自分より下位の実体のことを，自分がその原因であるがゆえに知るのだからである。それゆえ，推論を伴って知性認識するか推論を伴わずに知性認識するかということで天使が魂と異なるわけではないのである。

(9) 更に。同じ完全性によって完成されるものはすべて，種において同じであるように思われる。なぜなら，固有の現実態は固有の可能態において実現されるからである[21]。しかるに，天使と魂は同じ完全性によって，すなわち

---

[19] Leonina 版は differunt specie，Marietti 版は differunt secundum speciem，Robb 版は differunt のみ。

[20] Cf. *Liber de causis*, prop. 7 (8): “Omnis intelligentia scit quod est supra se et quod est sub se: verumtamen scit quod est sub se quoniam est causa ei, et scit quod est supra se quoniam acquirit bonitates ab eo.“（すべての知性実体は自分より上位のものも自分より下位のものも知っている。なぜなら，知性実体は下位のものの原因であるがゆえに下位のものを知っているのであり，上位のものから善性を受け取っているがゆえに上位のものを知っているのだからである。）

[21] Cf. *SCG* II, c. 73, 1489; *ST* I, q. 90, a. 4, sc.

恩寵と栄光と愛によって[22]，完成される。それゆえ，天使と魂は同じ種に属しているのである。

(10) 更に。〔終極の〕目的（finis）が同じであるものは，同じ種であるように思われる[23]。なぜなら，それぞれのものは目的へと自己の形相によって秩序づけられており，形相は種の根源（principium）だからである[24]。しかるに，天使と人間の目的は同じなのであり，それは永遠の至福である。そのことは『マタイによる福音書』22 章に[25]，天において復活の子らは天使のようになると言われていることから明らかである。グレゴリウスもまた，〔或る人々の〕魂は天使たちの階級に加えられると述べている[26]。それゆえ，天使と魂は同じ種に属しているのである。

(11) 更に。もし天使と魂が種において異なっているのであれば，自然本性の序列において天使は魂よりも当然上位にあるはずである。したがって，天使は魂と神の中間に存在するということになる。しかしながら，アウグスティヌスが言っているように[27]，我々の精神と神との間に中間者（medium）は存在しないのである[28]。それゆえ，天使と魂は種において異なっているのではない。

---

[22] Leonina 版と Marieti 版は et caritate，Robb 版は vel caritate.

[23] Cf. *ST* I, q. 75, a. 7, arg. 1.

[24] Cf. *ST* I, q. 76, a. 5, arg. 3.

[25] Mt. 22, 30:「復活の時には，めとることも嫁ぐこともなく，天使のようになるのだ。」（新共同訳）

[26] Gregorius Magnus, *Homiliarum in Evangelia*, II, 34 (PL 76, 1252):「わずかのことしか理解できないが，そのわずかなことを敬虔に兄弟たちに教える人々は多くいる。このような人人々は，天使たちのうちに数えられる人々である。また，神の寛大な賜物に養われて，天上の最高の秘密を把握もし，教えもすることのできるような人々がいる。彼らは，大天使の数のうちに入るとみなされる人々である。〔中略〕また，悪魔につかれた肉体から悪霊を退散させ，祈りの力と授かった権能の力でそれらを追い出す人々がある。彼らは，天上の能天使のうちに自分の位階を数える人々である。」熊谷賢二訳『福音書講話』（創文社，1995 年）215 頁

[27] Leonina 版は ut dicit Augustinus，Robb 版と Marietti 版は sicut Augustinus dicit.

[28] Augustinus, *De utilitate credendi*, XV, 33:「というのは，賢者は知性で神にしっかりと結びついているので，その間には，両者を分離するようなものは何ひとつ介在しないからである」赤木善光訳「信の効用」『アウグスティヌス著作集』4（教文館，1989 年）68 頁；*De Trin.* XV, I, 1:「人間が神の似像であるのは，他の生き物にまさるもの，すなわち理性と知

(12) 更に。同じ像の造形（impressio）は〔それを受け取る〕様々なものにおいて種を異にするのではない。たとえば，金における円形の像も銀における円形の像も[29]，同じ種に属するのである。しかるに，天使におけるのと同じように魂においても神の像が存在する[30]。それゆえ，天使と魂は種において異なるのではない。

(13) 更に。その定義が同じであるものは同じ種である。しかるに，天使の定義は魂にも適合する。なぜなら，ダマスケヌスが天使の定義を次のように述べているからである[31]。「天使とは非物体的実体であり，常に可動的（mobilis）であり[32]，意思において自由であり，神に仕える者であり，自然本性によってではなく恩寵によって不死性を得ている者である[33]。」これらのことはすべて人間の魂にも適合するのである。それゆえ，魂と天使は同じ種に属するのである。

(14) 更に。最終的種差（ultima differentia）において一致しているものは，すべて同じ種に属する。なぜなら，最終的種差は種を確定するものだからである。しかるに，天使と魂は最終的種差において一致している。すなわち，知性的なものであることにおいて一致しているのである。知性的なものであることが最終的種差に他ならない理由は，最終的種差とは常に最上の完成なのであり，天使の本性においても魂の本性においても，知性的なもの

性においてである。〔中略〕これらは精神（mens）ないし心（animus）にぞくする。〔中略〕私たちが今，この本性を超える真なるものを探求するならば，それがまさに神であって，造られることなく造る本性である。」（泉訳）

[29] Leonina 版は circuli（円形の），Robb 版と Marietti 版は Herculis（ヘラクレスの）

[30] Cf. *ST* I, q. 93, a. 1

[31] Joannes. Damascenus, 『正統信仰論』*De fide orthodoxa* II, 3.

[32] 「可動的なるもの」とは自ら動きうるもののことである。Cf. *ST* I, q. 70, a. 3, arg. 5:「然るに，「可動的なるもの・動かされるもの」mobilia の類において，その第一なるものは，『自然学』第八巻に照明されているごとく，自己自身を動かすところのものにほかならない。〔中略〕然るに，やはり同巻において示されているごとく，ひとり魂を持つもののみが自己自身を動かす。」山本清志訳『神学大全』（創文社，1985 年）

[33] Leonina 版と Robb 版は immortalitatem suscipiens，Marietti 版は immobilitatem suscipiens.

であること以上に高貴なことはないからである[34]。それゆえ，天使と魂は種において異なるのではない。

(15) 更に。種において存在していないものは，種的に異なることはできない。しかるに，魂は種において存在しているのではなく，むしろ種の部分である[35]。それゆえ，天使と種的に異なることはできないのである。

(16) 更に。定義は固有の意味では（proprie）種に適合する。したがって，定義されうるものではないものは，種においては存在していないように思われる。しかるに天使と魂は定義されうるものではない。なぜなら，先に明らかにされたように，それらは質料と形相から複合されたものではないからである[36]。すべての定義には質料としての何かと形相としての何かが含まれているのであり，そのことは『形而上学』第 8 巻においてアリストテレスが述べていることによって明らかである[37]。そこにアリストテレスは，もし諸事物の種がプラトンが主張したように質料を持たぬものであるならば，それらは定義されうるものではないと述べているのである[38]。それゆえ，固有の意味では，天使と魂が種的に異なるとは言われえないのである。

---

34 Cf. *ST* I, q. 75, a. 7, arg. 2:「最終的種差 ultima differentia specifica は，種の特質 ratio を完成せしめるものゆえ，最も高貴なものである。然るに，魂ならびに天使において，知性的であるということ以上に高貴なるものはない。それゆえ，魂ならびに天使は最終的種差において一致する。従って，両者は一つの種に属する。」（大鹿訳）

35 Cf. *ST* I, q. 75, a. 4, ad 2:「どのような個別的実体もがことごとくヒュポスタシス乃至はペルソナであるわけではなく，ただ，種の完全な本性を有するものであってこそ然るのである。だから，手や足はヒュポスタシスとかペルソナとか呼ばれることはできない。魂の場合もこれと同様である。魂は人間という種の部分なのだからである。」大鹿一正訳『神学大全』6（創文社，1962 年）

36 Cf. *QDA*, q. 2 et 6.

37 Aristoteres, *Metaph*. VIII, 1043b23-32:「こうしてそれゆえに，ある種の実体には，すなわち，感覚的のにせよ思惟的のにせよ，〔質料と形相との〕結合体の実体には，定義や説明方式がありうるが，しかし結合されてこの実体を成すところの第一の構成要素には決してありえない。というのは，定義するところの説明方式は，或るなにかについて他のなにかを言い表すものであり，そして〔この説明方式の要素のうちの〕その一つ〔類〕は質料のようなものであり他の一つ〔種差〕は型式のようなものであるからである。」出隆訳『アリストテレス全集』12（岩波書店，1988 年）

38 Cf. *ST* I, q. 75, a. 4, cor.:「ここに私がこうしたことをいうのは，或るひとびとが，形相のみが種 species の概念 ratio に属し，質料はこれに反して個物の部分であって種の部分で

(17) 更に。すべての種は類と種差から成る。そして，類と種差はそれぞれ異なる事柄に基づいている。たとえば，動物という人間の「類」は感覚しうる本性に基づいており，理性的という人間の「種差」は知性的である本性に基づいているのである。ところが，天使と魂には類と種差が基づきうるような異なる事柄が存在しない。なぜなら，天使と魂の本質は単純形相（forma simplex）なのだからである。更には，天使と魂の「存在」（esse）もまた類でも種差でもありえない。なぜなら，アリストテレスが『形而上学』第 3 巻において証明しているように，「存在すること」は類でも種差でもないからである[39]。したがって，天使と魂には類と種差がないのであり，それゆえ，天使と魂は種的に異なることはできないのである。

(18) 更に。種において異なるものはすべて反対対立する相違によって異なる[40]。しかるに，非質料的な諸実体においては反対対立（contrarietas）は存在しない。反対対立は滅び（corruptio）の根源だからである[41]。それゆえ，天使と魂は種において異なるのではない。

(19) 更に。天使と魂が異なるように思われるのは，とりわけ，天使が身体と合一されていないのに対して魂は身体と合一されているということに基づい

はないと主張したからにほかならない――。こうした考えは然し真たりえないのである。けだし，種の本性には定義の表示するところのものが属している。然るに，自然物に場合にあっては，定義の表示するところは単に形相にとどまらないのであって，それは形相ならびに質料におよぶ。」（大鹿訳）

[39] Aristoteres, *Metaph*. III, 998b22-27:「しかるにこの一というのも存在というのも，存在事物の単一の類ではありえない。というのは，一面において，いずれの類の差別もそれぞれみな存在しており一つであることは必然であるのに，他面，類の種がこの種に特有の差別〔すなわち種差〕の述語とはなりえないのと同様に，類が，類それ自らの種から離れてそれだけで，その類に特有の種差の述語となることは不可能だからであり，したがって，もし一や存在がいやしくも類であるかぎり，いかなる種差も存在するとは述べられず一つであるとも言われないであろうからである。」（出訳）

[40] Cf. Aristoteres, *Metaph*. VII, 1037b20:「けだし類が種に区分されるところの種差は互いに反対のものどもであるから。」（出訳）

[41] Cf. Aristoteres, *Phys*. I, 191a3-7:「対立相反関係にあるものには何かその基底となるものがなければばならず，また対立相反関係にあるものは二つとしなければならないことが明らかになっている。ただし，別の意味では，必ずしもそうしなければならないわけではない。対立相反関係にあるもののどちらか一方が現れたり現れなかったりすることで，変化を引き起こすには十分だろうからである。」（内山訳）

ている[42]。しかし，このことが魂を天使から種において異なるものとするのは不可能である。なぜなら，身体は質料として魂に関係づけられているのだからである。質料が形相に種を与えるのではなく，むしろ逆なのである。

以上のことから，いかなる意味においても，天使と魂は種において異なってはいないのである。

【反対異論】

しかし反対に。種において異ならないものは，質料によって異なる以外には数的に異なることもない[43]。しかるに，これまで論じてきたことから明らかなように，天使と魂は質料を持たないのである。それゆえ，もし天使と魂が種において異ならないのであれば，数的にも異ならないことになるが，それは明らかに偽である。それゆえ，それらは種において異なる他はないのである[44]。

【解答】

解答。或る人々は人間の魂と天使は同じ種に属すると言っている。そのことを最初に主張したのはオリゲネスだと思われる[45]。オリゲネスは古代の異端者

---

42 Cf. *ST* I, q. 75, a. 7, arg. 3:「魂が天使と異なるのは，魂が身体と一つになっているということによるものであるとしか考えられない。だが，身体は魂の本質 essentia の外にあるものゆえ，身体が魂の種を構成するとは考えられない。従って，魂と天使とは一つの種に属する」（大鹿訳）

43 Leonina 版は etiam numero non differunt nisi per materiam，Robb 版と Marietti 版は sed numero, non differunt nisi per materiam.

44 たとえば，個別のリンゴ A B C はリンゴという種としては一つであり種としては異ならないが，それぞれの質料によって区別され，数的に（個々のものとして）異なっているのである。しかし非質料的な実体の場合は質料による区別はありえず，それぞれが異なる種として区別されるしかない。天使と魂は共に非質料的な実体なのであるから，それぞれが異なる種として数的に異なる他はないのである。

45 Cf. Origenes, *De principiis* III, 5, 4:「すべての理性的被造物が同一の本性を有するものであることは，多くの証拠によって証明されているからである」; II, 8, 2:「理性的な認識力を有する，動くことのできる実体という魂の定義が妥当であるとすれば，この同じ定義が天使たちにも該当すると思われる。彼らが持っているのは，理性的認識力と動き（motus）にほかならないからである。しかして同じように定義されるものの実体は，疑いもなく，同じである。」小高毅訳『諸原理について』（創文社，1978 年）

たちの誤謬，すなわち善の根源と悪の根源という区別を導入して事物間の相違はこれらの根源の相違に起因するとする誤謬，を避けることを望み[46]，すべての事物間の相違は自由意思によって生じるのだと主張した[47]。彼が言うには，初めに神はすべての被造物を等しいものとして，すなわち理性的な被造物を等しいものとして造られたのだが[48]，そのうちの或るものたちは神に従い，神への各々の侍従の度合に即してより善いものへと昇進した。しかし或るものたちは自由意思によって神から離れ，神からの各々の離反の度合に即してより劣悪なものへと落ちたのである[49]。こうして，創造の初めにおいてはすべてのものは一様（uniformis）であったのだが，或るものたちは諸々の天体に合体され，或るものたちは人間の身体に合体され，また或るものたちは悪霊たちの劣悪さにまで歪められたのである[50]。

しかしながら，オリゲネスのこの見解から見て取りうる限り，彼は個々の被造物の善性にばかり目を向けていて，全体についての考察は見落としている。

---

46 Cf. Origenes, *De principiis* I, 8, 2:「我々は天上の者に関しても，人々の魂に関しても，霊的な者どものうちに，相異なる本性を持っているものがあり，したがってそれらが相異なる創造主たちによって作られたと言ってる人々のばかげた不敬な作り話に同調しないであろう。」（小高訳）

47 Cf. Origenes, *De principiis* I, 8, 3:「我々〔の見解〕によると，すべての理性的被造物は，例外なしに，善と悪の両方をなる能力（capax）を有している。〔中略〕同様に，他の被造物も両方の能力を有しているが，彼らは自由意志（arbitrii libertas）によって悪を避け，善に固執しているのである。」（小高訳）

48 Leonina 版は a principio fecit omnes creaturas equales, rationales scilicet，Robb 版と Marietti 版は fecit omnes creaturas rationales a principio aequales.

49 Cf. Origenes, *De principiis* II, 9, 6:「神が造ろうと望まれたもの即ち理性的諸存在者を「はじめに造られた」時に，〔中略〕神は被造物をすべて等しく（aequales）かつ同様のもの（similes）として創造された。〔中略〕しかしながら〔中略〕理性的な諸被造物は自由意志の能力を与えられていたので，その意志の自由が各々を，あるいは神を模倣することによって進歩させ，あるいは怠惰によって後退させたのである。既に述べたように，これが理性的被造物間の相違の原因となった。」（小高訳）

50 Cf. *ST* I, q. 47, a. 2, cor:「最初に神は理性的被造物のみを，そしてそのすべてを均等なものとして創造した。だが，彼らの間に，まず各自の自由な意思決定 liberum arbitrium に基づいて不均等が生じきたった。〔中略〕神から離反した理性的被造物は，それぞれの異なった罪に従って種々さまざまな「身体という物体」へ拘束されるにいたった。そしてこれが，諸々の物体の創造とか区別とかの因にほかならない，とオリゲネスは説くのである。」日下昭夫訳『神学大全』（創文社，1973 年）

だが賢明な制作者は，諸々の部分を配置する際に，これとかあれといった個々の部分の善を考えるだけでなく，むしろそれ以上に全体の善を考えるものである。それゆえに建築家は，家全体の構造が善いものとなるように，家のあらゆる部分を同等に見栄えの良いものにするのではなく，或る部分はより多く，或る部分はより少なく見栄えの良いものにするのである。これと同じように，動物の体においても，体のすべての部分が目の明澄さを持つのではない。もしそうであれば，その動物は不完全なものでしかないであろう。その動物が完全なものでありうるために，各部分には差異があるのである。同様に，神もご自身の英知に基づいて，すべてのものを同等なものにお造りにはならなかった。もしそうであったならこの世界は，存在するものの多なる階序を持たない不完全なものでしかなかったであろう。それゆえ，なぜ神がその御業において優劣をつけて被造物をお創りになったのかという問いは，なぜ制作者が自分の作品において各部分の多様性を設定するのかという問いと似ているのである。

そのため，オリゲネスのこの理由からではなく，オリゲネスの見解に変更を加え[51]，異論において触れられている別の諸々の理由から[52]，知性的実体はすべて同じ種に属していると主張している人々がいるのである。しかしながら，この主張そのものが不可能であるように思われる。なぜなら，前の問題において述べられたように[53]，もし天使と魂が質料と形相から複合されたものではなく形相のみのものであるならば，天使たちがお互いに区別されるのは，もしくは天使が魂と区別されるのは，形相的な相違によるものでなければならないからである。ただ，もしかすると，天使たちも魂と同じように身体と合一されていて[54]，先に魂について言われたごとく，身体との関係性による質料的な相違が天

51 Leonina 版は mutantes，Robb 版と Marietti 版は imitantes.

52 Leonina 版は propter alias tamen rationes，Robb 版は propter quasdam rationes，Marietti 版は propter aliquas rationes.

53 *QDA*, q. 6「魂は形相と質料から複合されたものであるか」を参照

54 Cf. Origenes, *De principiis* I, 6, 4:「またいかなる物体的添加なしに存在しうるのは，ただ神のみ，即ち父と子と聖霊のみの独自の本性だからである。」（小高訳）また，ボナヴェントゥラも，純粋な形相なのは神のみであり，天使も含めて被造物はすべて形相と質料か

使たちにもありうると主張する人がいるかもしれない[55]。しかし，この主張は一般的なものではなく，また，たとえそう主張されたとしても，〔知性的実体がすべて同じ種に属しているという〕この主張を後押しするものではない。なぜなら，〔天使たちが合一されているという〕その身体は魂が合一されている人間的な身体とは種的に異なることは明らかだからであり，種的に異なる身体には種的に異なる完全性が必然的に属するはずだからである[56]。したがって，天使たちが身体の形相であるという見解は排除される[57]。そして，もし天使たちが質料と形相から複合されたものではないのならば，天使たち相互の相違は，そして天使たちと魂との相違は，形相的な相違である他はないのである。しかるに，形相はものに種別（species）を与えるものなのであるから[58]，形相的な相違は種を異ならせる。したがって，天使たちは，魂と種的に異なっているだけでなく，天使相互においても種的に異なっているということが帰結するのである。

また，たとえもし誰かが天使たちと魂は質料と形相から複合されているのだと主張するとしても，〔天使と魂が同じ種に属するという〕この見解はやはり成立しえない。その理由は次のとおりである。もし，諸々の形相によってのみ分化された同一の質料が下界のすべての物体に属しているごとく，それ自体にお

ら成ると考えていた。坂口ふみ『天使とボナヴェントゥラ』（岩波書店，2009 年）136 頁参照

[55] Cf. *QDA*, q. 6, ad 13:「魂は，魂がそれによって形成されているところの質料によって個体化されているのではなく，魂がその内に存在している質料との関係性に即して個体化されているのである。」すなわち，人間の魂は質料を含まないが，各々の身体の内に魂が在るということによって，その意味で質料的に個別化されるのである。

[56] Aristoteres, *De anima* II, 414b25-27:「それぞれのものの終極実現状態は，「可能状態においてそれぞれのものであるもの」のうちに，つまりそれぞれに固有の素材の内に成立することが，その自然本来のあり方だからである。」中畑正志訳「魂について」『アリストテレス全集』7（岩波書店，2014 年）

[57] Leonina 版は angeli sint forme corporum，Robb 版と Marietti 版は angeli non sint formae corporum.

[58] Leonina 版と Robb 版は dat speciem rei，Marietti 版は dat esse rei.　Cf. Aristoteres, *Phys*. II, 194b25-26:「しかし，他の意味では，事物の形相または原型がその事物の原因と言われる,そしてこれはその事物のそもそもなにであるか〔本質〕を言い表す説明方式ならびにこれを包摂する類〔中略〕およびこの説明方式に含まれる部分〔種差〕のことである。」出隆訳「自然学」『アリストテレス全集』3（岩波書店，1968 年）

いて同一の質料がもし魂の内にも天使たちの内にも存在するならば，必然的に，その同一で共通的な質料の分割が，天使たち相互の区別および天使と魂の区別の原理であることになる。しかるに，質料はその本質側面において，それ自体はあらゆる形相を欠いているのであるから，形相を受け取る前は，質料の分割は量的な次元（dimensio）によるより他には知性認識されえないであろう。（形相は質料の分割にしたがって多数化されるのである[59]。）それゆえにアリストテレスは『自然学』第一巻において，量が取り除かれれば実体は不可分割的なものにとどまると言っているのである[60]。しかるに，次元に規定された質料によって構成されているものは「物体」なのであって，「物体と合一されたもの」であるにとどまらないのである。したがって，天使と魂は物体であることになる。しかし，正常な精神の人は誰もそんなことを言っていない。その理由はとりわけ，知性認識は如何なる身体のはたらきでもありえないことがすでに証明されているからである[61]。他方，もし天使たちの質料と魂の質料が同一で共通的なものではなく，それぞれ異なる秩序に属するものなのであれば，そのことは，ちょうど天体と下界の物体の質料は同一で共通的なものではないとされているのと同じように，それぞれ異なる形相への秩序に基づいているより他にはありえない。そしてこのような質料の相違は種の違いを生じさせるのである。それゆえ，天使たちと魂が同一の種に属することは不可能であるように思われる。

だが，それらがいったい何に基づいて種的に異なっているのかを考察する必要がまだ残っている。そして我々は質料的諸実体の考察を通して知性的諸実体

[59] Leonina 版と Marietti 版は secundum materiae divisionem multiplicatur，Robb 版は secundum materiae dispositionem multiplicatur.

[60] Cf. Aristoteres, *Phys*. II, 185a32-b5:「あるものはどれだけかの量であるということになる。〔中略〕何らかの大きさを持つ場合，それは何らかの量だということになる…。」（内山訳）

[61] Cf. *QDA* q. 1, cor., u. 234-242:「〔理性的魂は〕質料および質料の諸条件なしに可知的形象を受け取るだけではなく，その固有のはたらきにおいては，『魂について』第三巻（429a24-27）で証明されているごとく，ちょうど目が見ることの器官であるように或る身体的なものが知性認識の器官であるかのような仕方で何らかの身体的器官と共同することも不可能である。」

の認知へと到るべきである。さて，質料的諸実体においては，自然本性の完全性の異なる段階が種の相違を構成している。このことは，質料的実体の諸々の類のことを考えてみれば容易に明らかである。各元素（elementa）よりもその混合体（corpora mixta）の方が完全性の段階においてより上であることは明らかであるし, 鉱物よりも植物の方が上であり, 植物よりも動物の方が上である。そして，それぞれの類の内に自然本性の完全性の段階に即して諸々の種の相違が見いだされる[62]。たとえば，元素においては土が最も下位であり火が最も高貴である[63]。同様に，鉱物においては自然本性が段階的に様々な種を経て金の種へと至ることが見いだされる。植物においては完成された樹木の種へと至るまでの段階が，そして動物においては人間の種に至るまでの段階が見いだされる。だがしかし，或る動物たちは移動することができず触覚しか持たないため，極めて植物に近い。同様に，アリストテレスが『植物について』に述べていることから明らかなように，植物のうちの或るものは無生物に近い[64]。このことから，アリストテレスは『形而上学』第 8 巻において，自然的事物の種は，数の種と同じように，一つのことが加えられたり減ぜられたりすることによって種が変わると言っているのである[65]。そして非質料的諸実体においても，これと同様に，自然本性の完全性の様々な段階が種の違いを生み出すのである。

しかしながら，質料的諸実体と非質料的諸実体とでは或る点に関して異なっている。と言うのも，段階の相違が存在するところではどこであれ，必ずその

---

62 Cf. *ST* I, q. 47, a. 2, cor.:「自然的な諸事物の間にあって，諸々の種が段階的に秩序づけられているのが見られるのであって，たとえば諸元素よりもその混合体のほうがより完全なるものであるし，また鉱物よりも植物のほうが，そして植物よりも動物のほうが，そして諸々の動物よりも人間のほうが，それぞれより完全なものなのであり，そしてこれらに属する個々の種の間においても，或る一つの種が他の種よりもより完全なものであることが見いだされる。」（日下訳）

63 4 つの元素についてはアリストテレス『生成と消滅について』第 2 巻第 3 章を参照。

64 Cf. Aristoteres, *De plantis* I, 1

65 Cf. Aristoteres, *Metaph*. VIII, 1043b33-1044a2; Thomas, *ST* I, q. 47, a. 2, cor.:「けだし『形而上学』第八巻にいうごとく，事物の形相は数のごとくである。数の場合は，すなわち「一」unitas の加わり乃至は減ぜられることによってその種 species が別な種になってしまうのである。」（日下訳）

段階は或る一つの根源（principium）に対する序列によって把捉されるのだからである。質料的諸実体においては，種の相違を生じさせる様々な段階は，第一の根源すなわち「質料」に対する序列において捉えられる。つまり，〔質料に最も近い〕第一の種は最も不完全であり，より後のものほど，第一のものに完全性が付加されることによって，より完全である。たとえば，混合体のほうが各元素の種よりもより完全な種を有するが，それは混合体は各元素が持っている完全性に加えてより多くの完全性を有しているからである。植物の鉱物に対する関係も，そして動物の植物に対する関係もこれと同様である。

しかし，非質料的諸実体においては，様々な種の段階の序列は質料との関係に即して捉えられるのではない。彼らは質料を持たないのである。非質料的諸実体における種の段階の序列は，まさしく最も完全である第一能動者（primum agens）[66] に対する関係に即して捉えられるのである。すなわち，彼らのうちの〔第一能動者に最も近い〕第一の種は，より第一能動者に似ているのであるから，第二の種よりもより完全である。第二の種は完全性において第一の種に劣るのであり，このように次々と劣ってゆき，その最低の種へと至るのである。ところで，第一能動者の最高の完全性は，あらゆる善性と完全性を単純な一性において有しているということにある[67]。それゆえ，非質料的実体は，第一能動者に近ければ近いほど，自らの単純な本性のうちにより完全な善性を有しており，自らの完成のために，内属する諸形相をより少なく必要とするのである[68]。そしてこれが段々と遠のいてゆき，非質料的実体の最低の段階に位置する人間の魂へと至る。それはちょうど感覚的諸事物の類における第一質料のようなものである。ゆえに魂は，自らの本性のうちに可知的完全性（perfectiones intelligibiles）を有しておらず，ちょうど第一質料が諸々の可感的形相に対して可能態にあるのと同様に，諸々の可知的なものに対して可能態にある。それゆえ，魂はその固有のはたらきのために，そのはたらきを現実態におけるものとするために，

66　すなわち，神である。
67　神のあらゆる意味における単純性については *ST* I, q. 3, a. 7 を参照
68　Cf. *SCG* II, c. 98, 1836.

諸々の可知的形相を必要とするのであり，それらを感覚的諸能力によって外的諸事物から獲得しなければならないのである。そして，感覚のはたらきは身体器官によってなされるのであるから，まさに自らの本性の状態そのものから，魂には，身体と合一されるということが，また，自らのうちに完全な種を有するのではなく，人間という種の部分であるということが，適合するのである。

【異論への解答】

(1) 第 1 の論に対しては次のように言わなければならない。天使と魂の知性認識のはたらきは同じ種に属していない。そのことは，はたらきの根源である形相が種的に異なるなら，必然的に，はたらきそれ自体も種的に異なるということから明らかである。たとえば，熱するはたらきと冷やすはたらきは，〔それらのはたらきの根源である〕熱と冷の相違に即して異なるのである。しかるに，魂がそれによって知性認識を行うところの可知的形象は表象像から抽象されたものである。したがって，それらは天使たちがそれによって知性認識を行うところの可知的形象と同じ特質のものではない。『原因論』に知性実体はすべて形相で満ちていると述べられているように[69]，天使たちの可知的形象は彼らに生得的なものなのである。それゆえ，人間の知性認識と天使の知性認識は同じ種に属するのではない。天使が推論を伴わずに知性認識するのに対し魂は推論を伴って知性認識するということもこの違いから生じている。魂は，可感的な諸々の結果からその原因である諸力へと到達しなければならないのであり，また，可感的な付帯性を通して感覚ではとらえられない事物の本質へと到達しなければならないのだからである[70]。

(2) 第 2 の論に対しては次のように言わなければならない。知性的魂は，諸々の原理と結論の両方を，諸表象像から抽象された諸形象を通して知性認識

[69] *Liber De causis*, prop. 9 [10]. Cf. Thomas, *QDV*, q. 8, a. 15, cor.

[70] Leonina 版と Marietti 版は in essentias rerum, que/quae *non* subiacent sensui，Robb 版は in essentias rerum quae subjacent sensui. イタリックは筆者。

するのである。これらの知性認識のはたらきが種において異なるわけではないのはそのためである。

(3) 第 3 の論に対しては次のように言わなければならない。運動がその運動の終局がそこに在るところの類と種に還元されるのは，運動がなされる以前のまだ可能態にある時と，現実態と可能態の中間において運動がなされている時と，運動が完了して終局にある時に，その運動が同一の形相である限りにおいてである。しかし，推論を伴う魂の知性認識のはたらきと推論を伴わない天使の知性認識のはたらきは，種的に同一の形相に即したはたらきではない。それゆえ，同一の種に属している必要はないのである。

(4) 第 4 の論に対しては次のように言わなければならない。事物の種は，その事物の固有の本性に即してその事物に適合するところのはたらきに基づいて判別されるのであって，別の本性の分有に即してその事物に適合するところのはたらきに基づいて判別されるのではない。たとえば，鉄という種は，火に焼かれている場合にそれに適合するところの可燃性に基づいて鉄であると判別されるのではない。もしそうであるなら，木材もまた火に焼かれると燃えるのであるから，鉄と木材は同じ種であると判別されることになってしまう。それゆえ私は言う。「御言葉の内に見る」（videre in Verbo）ということは魂と天使の本性を超えるはたらきなのであり，このはたらきは，栄光の照明による，より上位の本性すなわち神的本性の分有に基づいて，魂と天使に適合するのである。それゆえ，〔このはたらきに基づいて〕天使と魂が同じ種に属すると結論づけることはできないのである。

(5) 第 5 の論に対しては次のように言わなければならない。異なる天使たちの内に同じ特質の可知的諸形象が存在しているわけではない[71]。自らの本質という一つのものによってすべてを知るところの神により近い，より上位の知性的実体であればあるほど，彼らの内の可知的諸形相はより高尚なの

---

[71] Leonina 版は in diuersis angelis，Robb 版と Marietti 版は etiam in diversis angelis.

であり，より多くを知るための有効性のより高いものなのである[72]。それゆえに『原因論』に，上位の知性実体はより普遍的な諸形相によって知性認識すると述べられているのである[73]。ディオニシウスもまた『天上位階論』第 12 章において，上位の天使たちはより普遍的な知識を有していると言っている[74]。それゆえ，異なる天使たちの知性認識のはたらきは同じ種に属していないのである。たしかに天使たちはみな，外部から受け取ったのではない生来の諸形象によって知性認識するのであり，ゆえに，どの天使の知性認識も推論を伴わないものなのではあるが。

(6) 第 6 の論に対しては次のように言わなければならない。優劣（magis et minus）には二通りある。一つは，たとえば木材が白い色を分有する場合のように，質料が同じ形相を異なる仕方で分有することによる優劣である。この優劣は種を異ならせない。もう一つは，形相の完全性の異なる段階による優劣である。これは種を異ならせる。たとえば諸々の色は，光とどれほど近い関係にあるかにしたがって，種的に異なるのである。異なる天使たちにおいて見出されるのも，この優劣である。

(7) 第 7 の論に対しては次のように言わなければならない。すべての魂が均等な水準で知性認識するわけではないが，すべての魂は同じ特質の諸形象によって，すなわち諸表象像から受け取られた諸形象によって，知性認識するのである。したがって，各々の魂が均等ではない仕方で知性認識するということが生じるのは[75]，諸形象がそこから抽象される感覚的諸能力の違

---

72 Cf. *ST* I, q. 55, a. 3; q. 89, a. 1, cor.:「神は，自らの一なる本質によってすべてを知性認識するのであるし，知性的諸実体のうち，上位のものは，幾つもの形相によって知性認識するとはいっても，然しやはり，彼らにおける知性認識のちからの有効性 efficacia のゆえに，比較的少数の，より普遍的な，そして事物の把捉のための有効性のより大きい形相によって知性認識するのであ〔る〕。」（大鹿訳）

73 *Liber De causis*, prop. 9 [10].

74 Dionysius, *De caelesti hierarchia*, XII, 2:「最下位の階級は上位の階級の普遍的な優れた力には及ばないと，われわれは言っている。」今義博訳「天上位階論」『中世思想原典集成』3（平凡社，1994 年）

75 Leonina 版と Robb 版は contingit，Marietti 版は convenit.

いによるものである。そして感覚的諸能力の違いは[76]，各々の身体の構成の違いから生じるのである[77]。それゆえ，この優劣の違いは質料的な違いによって生じるのであるから，種を異ならせるものではないことは明らかである[78]。

(8) 第 8 の論に対しては次のように言わなければならない。何かを他のものによって知るということが生じるのには二つの仕方がある。一つは，認識される或るものを別の認識されるものによって知るという仕方であり，つまり区別された各々の認識がある場合である。たとえば，人が或る基本原理によって結論を[79]，それぞれを別個に認識することによって知ることがそれにあたる。もう一つは，認識される或るものを，それがそれによって知られるところの形象によって知るという仕方である。たとえば，我々が石を，目の内にある石の形象によって知ることがそれにあたる[80]。しかるに，或るものを他のものによって知る第一の仕方は推論を生じさせるが[81]，第

---

76 Leonina 版と Robb 版は quae，Marietti 版は quod.

77 Cf. *ST* I, q. 85, a. 7, cor.:「或るひとびとはよりよく構成された身体を有しているため，知性認識におけるより大きなちからのある魂を与えられているのであ〔る〕。」（大鹿訳）

78 Cf. *ST* I, q. 85, a. 7, ad 3:「質料のさまざまな構成に由来するのでしかないごとき形相の相違は種的な差異を生ぜしめるものではなく，それは単に数的な差異を生ぜしめるにすぎない。」（大鹿訳）

79 Leonina 版と Robb 版は per principium，Marietti 版は per principia.

80 Cf. *QDV*, q. 2, a. 3, ad 3:「別々の認識の働きによって両者〔原因と結果〕をそれぞれ認識するときは，そのときにのみ知性は，或るものから別のものへと推論していると言われるのである。たとえば，人間の知性は別々の働きによって原因と結果を認識し，したがって，結果を原因によって認識するとき，その知性は原因から結果へと推論していると言われる。しかし認識する力がそれによって認識する手段と認識される事物とに同じ働きによって向けられるとき，そのときには認識の内に何らの推移も存在しない。たとえば，視覚が自らの内にある石の形象によって，石を認識するとき，あるいは鏡に映っているものを鏡によって認識するとき，視覚は推移しているとは言われない。なぜなら，視覚にとっては，事物の類似へともたらされることと，こうした事物の類似を通して認識されるところの事物へともたらされることは，同じであるからである。ところで，神が自己の本質によって自己の結果を認識するのは，この仕方によってである。」山本耕平訳「真理論」『中世思想原典集成』第Ⅱ期 1（平凡社，2018 年）

81 Cf. *QDV*, q. 8, a. 15, cor.:「或るものが或るものから認識すると言われるのは，両者に向かう動は同じものではなく，最初に知性が或るものに動き，それから他のものに動く，という場合である。それゆえ，これは一種の推論である。さまざまな論証において明らかな通

二の仕方は推論を生じさせない。天使たちが結果によって原因をそして原因によって結果を知るのは，この第二の仕方によるのである。なぜなら，天使の本質そのものが自らの原因の或る似姿なのであるし，また，天使は自らが生み出す結果を自らに似たものにするからである[82]。

(9) 第 9 の論に対しては次のように言わなければならない。恩寵による諸々の完全性は，神的な本性の分有によって魂と天使に適合するのである。それゆえに『ペトロの第二の手紙』には「私たちが神の本性に共にあずかる者となるように，主は最高の尊い賜物を我々に与えてくださった」云々と述べられているのである[83]。したがって，これらの完全性における一致を理由に，魂と天使が同一の種に属していると結論づけることはできないのである。

(10) 第 10 の論に対しては次のように言わなければならない。近接的で自然的な目的が同じであるものは，種において同じである。しかしながら，永遠の生の至福は[84]，究極的で超自然的な目的なのである[85]。それゆえ，この異論の論理は妥当しない。

(11) 第 11 の論に対しては次のように言わなければならない。アウグスティヌスは，我々の精神と神との中間には何も存在しないと，尊厳と本性の階序に基づいてそう考えていたわけではない。なぜなら，或る魂が他の魂よりも高貴である場合さえあるからである[86]。彼がそう言っている理由は，我々

りである。というのは，最初，知性は基本原理にのみ向けられ，第二に基本原理を通して結論へと導かれるからである。」（山本訳）

82 Cf. *QDV*, q. 2, a. 3, ad 3:「いずれの作出原因であれその内にある結果は，もし原因それ自体であるものが把握されるのなら，原因そのものと別のものではない。たとえば，技の内にある家は技そのものと別のものではない。というのは，結果が能動的根源の内にあるのは，能動的根源が自己に結果を類似化することによってであり，他方，この能動的根源は技がそれによって働くそのもの自体であるからである。」（山本訳）

83 *Epistula Petri* II, 1. 4.

84 Leonina 版は beatitudo uite eterne，Robb 版と Marietti 版は beatitudo aeterna.

85 Cf. *ST* I, q. 75, a. 7, ad 1:「こうした論旨は，身近な自然的目的についてならば妥当する。だが，永遠の至福は究極的な超自然的目的なのである。」（大鹿訳）

86 Leonina 版と Robb 版は quia etiam una anima est alia nobilior，Marietti 版は quia una natura non sit alia nobilior.

の精神は神によって直接的に義とされ，そして神のもとで至福たらしめられるからである[87]。それは，たとえて言うならば[88]，一介の兵士が王の直接の配下にあるようなものである。そしてこの場合その理由は，王の配下に彼より上位の者が誰もいないからではなく，王以外に彼に対する支配権を持つ者が誰もいないからなのである。

(12) 第 12 の論に対しては次のように言わなければならない。魂も天使も完全な神の像なのではない[89]。ただ御子のみがそうなのである[90]。それゆえ，魂と天使が同じ種に属している必然性はない。

(13) 第 13 の論に対しては次のように言わなければならない。そこに述べられている定義は, 天使と同じ仕方で魂にも適合するわけではない。なぜなら，天使は非物体的実体であるが，それは天使が物体ではないからであり，また物体と合一するものでもないからである。この後者のことは，魂には言われえないのである。

(14) 第 14 の論に対しては次のように言わなければならない。魂と天使が一つの種に属すると主張している人々は，この異論が挙げている論理を最も強固なものと見なしている。しかし，その結論は必然的なものではない。と言うのも，最終的種差がより高貴なものであるためには，本性の高貴さに関してのみならず，本性の特殊的確定（determinatio）に関してもそうでなければならないからである。なぜなら，最終的種差とは言わば，先行するすべてのことについての現実態だからである。それゆえ，天使においても魂においても，最も高貴なこととは，単に知性的であるということなので

---

87 Cf. *ST* I-II, q. 5, a. 6.

88 Leonina 版は sicut si diceret quod，Robb 版は sicut se diceretur quod，Marietti 版は sicut si diceretur quod.

89 知性的本性に関しては天使が人間以上に神の像のごとくであるが，或る限られた意味では人間のほうが天使以上に神の像のごとくである。*ST* I, q. 93, a. 3 を参照

90 像（ymago）という名称が御子（Filius）に固有のものであることについては *ST* I, q. 35, a. 2; q. 93, a. 1, ad 2 を参照

はなく，どのような仕方で知性的であるかということなのである[91]。同様のことは可感的な事物においても明らかである。そうでなければ[92]，すべての獣は同一の種に属していることになるであろう。

(15) 第 15 の論に対しては次のように言わなければならない。魂は種の部分であるが，種を与えている根源でもある[93]。そして，このことに基づいて，魂の種について今探究されているのである。

(16) 第 16 の論に対しては次のように言わなければならない。固有の意味において定義されうるのは種のみであるけれども，必ずしもすべての種が定義されうるものである必要はない。と言うのも，非質料的諸事物の種は，思弁的学知において何かが知られるのと同じような仕方で定義や論証によって知られるのではなく，それらの端的な直観（intuitus simplex）によって知られるのだからである[94]。それゆえ，天使も固有の意味においては定義されえないのであるが——我々は天使について「それが何であるか」を知ら

---

91 Cf. *ST* I, q. 75, a. 7, ad 2:「最終的種差が，最も限定されたものたるかぎりにおいて最も高貴なものであるというのは，現実態が可能態よりも高貴なものであるというごときそういった意味においてでしかない。だがこうした意味においてならば，知性的 intellectuale ということが最も高貴なものではありえない。それは，すなわち，いまだ非限定的であり，知性的たること intellectualitas の多くの段階に共通的なものなのであって，それはあたかも，感覚的 sensibile ということが，感覚的な存在における多くの段階に共通的なものであるのと同様である。だから，すべての感覚的なるものが一つの種にふくまれるのでないごとく，同様にまた，すべての知性的なものが一つの種にふくまれるわけでは決してない。」（大鹿訳）

92 Leonina 版は aliter，Robb 版と Marietti 版は alias.

93 Cf. *QDA*, q. 1, cor., u. 285-289:「したがって，魂はそれ自体として自存しうるものであるゆえに自存者（hoc aliquid）であることが帰結する。それは，自らの内に完全な種を有するものとしてではなく，身体の形相として種を完成するものとしてである。」

94 Leonina 版は set per simplicem intuitum ipsarum，Robb 版と Marietti 版は sed quaedam cognoscuntur per simplicem intuitum ipsarum.

ないからである——[95]，しかし否定的な仕方でならば[96]，知られうるのである[97]。そして魂もまた，身体の形相であるという仕方で定義されるのである。

(17) 第 17 の論に対しては次のように言わなければならない。類と種差は二通りの仕方で捉えられうる。一つは，形而上学や自然学によってなされるような実在的な考察に基づく捉え方である。この捉え方においては，類と種差は異なる本性に基づいて捉えられなければならない。そして，この捉え方でならば，霊的諸実体においては類も種差も存在せず，それらは形相のみの存在であり，それぞれ単純な種（species simplices）であると言って何ら差しつかえない。もう一つは，論理学的な考察に基づく捉え方である。この捉え方においては，類と種差を異なる本性に基づいて捉える必要はないのであり，同一の本性のもとに，そこに何らかの固有なものと共通的なものが捉えられるのである。そして，この捉え方でならば，霊的諸実体の内に類と種差を措定することは何ら差しつかえのないことなのである[98]。

---

95 「それが何であるか」（quid est）とはつまり「その本質」のことである。非質料的実体の固有の種差が我々には知られえないということについては *De ente,* c. 5, u. 72-130 を参照

96 Leonina 版は per quasdam negationes，Robb 版と Marietti 版は per quasdam negationes vel notificationes.

97 Cf. *ST* I, q. 88, a. 2, ad 2:「諸学において上位の事物が取りあつかわれるのは，なによりも除去・否定 remotio の道によってである。〔中略〕非質料的諸実体の場合にあっては，これらのものがその何性 quidditates の把捉というごとき仕方でもって我々の認識するところとなることはありえない。諸学においてこれらのものに関する教えが我々に与えられるのも，むしろ除去・否定の道によってであり，また質料的諸事物に対する何らかの関わりあいを通路とすることによる。」（大鹿訳）

トマスによれば，我々が非質料的実体について知りうることはむしろ「それが何でないか」ということである。次の箇所も参照。*QDA*, q. 16, cor. u. 318-332:「それゆえ，魂は身体と合一している間，離在的諸実体の認識にまで達することが可能であるが，それは諸表象像から受け取られた形象によって導かれうる限度内においてである。しかしこの認識は離在的諸実体についてそれらが「何であるか」知性認識されるほどのものではない。なぜなら，それらの諸実体はこうした可知的諸形象との対比をまったく超越しているからである。〔中略〕我々はそれらがその果とは同じ性質のものではないということを知る。これはつまり，それらについて，それらが何であるかを知るのではなく，むしろそれらが何でないかを知るということである。」

98 Cf. *ST* I, q. 88, a. 2, ad 4:「被造の非質料的諸実体は自然的な類 genus においては決して質料的諸実体と一致するものではない。事実，「可能性」とか「質料」とかの，これら両者における意味 ratio は決して同じではないのである。それでいて然し，論理的な類 genus

(18) 第 18 の論に対しては次のように言わなければならない。類と種差について自然本性的に語るならば，その相違は反対対立的（contrarius）でなければならない[99]。なぜなら，類の本性は質料に基づいているのであり，質料は反対対立する諸形相を受容しうるものだからである。しかし，論理学的な考察に基づくなら〔反対対立的である必要はなく〕，いかなる対立（oppositio）であれ，諸々の相違においてそれで十分である。そのことは諸々の数の相違において明らかなのであり，そこに反対対立は存在しないのである。霊的諸実体においてもこれと同様である。

(19) 第 19 の論に対しては次のように言わなければならない。質料が〔形相に〕種を与えるのではないが，質料の形相に対する関係性によって，形相の本性は捉えられるのである[100]。

（以上）

においては質料的諸実体と一致する。つまり非質料的諸実体といえども，その何性 quidditas がその存在 esse たるのではない以上，やはり「実体」の範疇 praedicamentum においてあるのだからである。これに対して，神は，自然的な類についても論理的な類についても決して質料的諸事物と一致することがない。」（大鹿訳）；*In De Trinitate*, q. 6, a. 3, cor.:「他方，被造の非質料的諸実体の方はたしかに類のうちにある。そして，論理学的に考察すれば，これらは可感的諸実体と実体という遠い類においては一つになるのではあるが，しかし本性的に（自然学的に）言えば，同一の類として一つになることはない。それは，天体もこの下位の諸物体と類的に同じではないのと同様である。〔中略〕つまり，論理学者は，ただ端的に概念を考察するのであり，概念としては，非質料的なるものが質料的なるものと，不滅なるものが可滅なるものと一つであることは何ら差しつかえないのである。しかし，自然学者と第一哲学の探究者は，現実に在るものということに即して諸々の本質を考察する。従って，彼らは，可能態と現実態とのさまざまの様態を見出し，そして，これによってさまざまの在り方を見出す時には，さまざまの異なる類がある，と言うのである。」長倉久子訳註『神秘と学知』（創文社，1996 年）

99 Cf. Aristoteres, *Metaph*. X, 1058a8-28:「ところで，この差別性は一種の反対性であろう（このことは，帰納によっても明らかであるが）。というのは，あらゆるものは対立するものどもによって分割されるものであり，そして，反対のものどもが同じ類のうちにあるということは，さきに証示されたとおりであるからである。〔以下略〕」（出訳）

100 Cf. *ST* I, q. 75, a. 7, ad 3:「身体が魂の本質のうちに属しているわけではないが，然し，魂が身体と合一すべきもの unibilis であるということが，本性的に魂の本質には属している。だからして，本来，種においてあるところのものは魂ではなく，却って複合体なのである。」（大鹿訳）